

## 「道成寺の僧」

今昔物語集

編者 伝宇治大納言隆国

紹介者:榎本博康

### [紹介]

卷十四ノ三「紀伊国の道成寺の僧、法華を写して蛇を救いたる話」

昔、熊野に詣でる老若二人の僧があった。若い僧は並々ならぬ美男であった。途中、一軒の家に泊めてもらったが、あるじは独身の女性（寡婦か未婚かは明記されていないが、私の趣味で寡婦と考えよう）で二、三人の使用人が居る。女主人は若い僧を見初めて、夜に寝所に入ってきて、夫になってくれと迫る。僧は驚いて、まず熊野で旅の目的を済ませてから帰路に立ち寄る約束をする。

女は約束の日を数えながら準備をしていたが、僧は恐れて別の道を通って行った。それを知ることとなった女は大変に怒って寝屋に籠り、怒りと哀しみのうちに死ぬ。

使用人が泣いていると、十メートル位の大蛇が寝屋より出て、僧の通った道をたどって走り行く。二人の僧は道中で、大蛇が「野山を過ぎ疾(と)く走り来る」と聞くと、さてはあの女かと思って、「疾く走り逃げて」道成寺に逃げ入る。

寺の僧達は、鐘を取り下して若い僧を鐘の中に籠めて寺の門を閉じる。老僧は他の僧にまぎれて隠れた。ついに蛇は門を通り、鐘を入れた建物の戸をたたき壊し、鐘に巻きついて吊手を叩く。見ると両の目より血の涙を流している。やがて元来た方に走りさる。熱に焼けた鐘に水をかけて冷やして除けると、僧の姿はなくわずかに灰ばかりが残っていた。

後に老僧は法華経を写し供養したところ、若い僧と女は立派に成仏できたと夢枕に御礼に来て、にこやかに天に昇っていった。



土佐光重『道成寺縁起絵巻』より

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Dojo-ji\\_Engi\\_Emaki.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Dojo-ji_Engi_Emaki.jpg)

### [感想]

今昔物語は12世紀頃の成立と言われる。かつて芥川龍之介がそうしたように、文学のヒントの宝庫である。

この話はさらに人々の想像力を掻き立てて、安珍清姫の話となっていく。その話では父親が居て、女はその娘となり、父の冗談から若い僧が夫になると信じる。証言役の老僧の配役はなくなり、女の変身は戸外の日高川に変わってくる。

能の「道成寺」や歌舞伎の「京鹿子(きょうかのこ)娘道成寺」は、さらにこの後日談。焼けた鐘の替わりを、約四百年後に再興した法要の日、女人禁制の境内に白拍子が現れ、舞を奉納するとして鐘に近づく。激しい舞のあと、落ちる鐘の中に飛びこむ。鐘を引き上げると蛇体となった女が現れ、僧の法力と戦い、力尽きて再び日高川に飛び込んで姿を消す。

この演目は、歌舞伎では何と言っても坂東玉三郎ということになるだろうか。激しい踊りは非常に体力を使うものようだ。能楽の世界でも、高度な精神力と技術を必要とする人気曲である。

さて、本題の女が走ることにについてである。第1回東京国際女子マラソンは1979年11月に開催されたが、当時参加した選手の話として、ランパンで街中を走って練習するのは恥ずかしかったという。さらに昔々の大昔、12世紀の女性が日常生活でそうそう走るとは思えない。所が、女は激しい情欲と怒りの末に、大蛇に身を代えて走った。その思いの丈に日常を超えて、身を蛇に変えて走った。

今昔物語での女は、話の主導権を完全に握っている。まず家の主（あるじ）という身分であるが、若い僧に、「この家は男性を泊めるなどということはない。しかし、あなたを一目見て、夫にしたいと思って泊めたのだ」と言う。「私は独身ですから、かわいがってくださいね」とも。そして終夜（よもすがら）僧を愛撫する。僧は何とか言い逃れをして明方を迎えて出立する。

蛇身となって走るとは、足のない蛇がどうするのだろうかとは誰も思わない。これは勢いなのだ。ここでまた走る表現が増えた。「疾く走る」だ。この字は疾風という熟語でしか普段は用いないが、これは野山を一息に越えていく速さである。この姿を和歌山の野山に幻視することができよう。そして身は蛇でも心は人間である。ちゃんと門から入り、目からは血の涙を流すのだから、哀しい。

おっと、危ない所だ。女が走るのは愛欲に狂った末に男に裏切られた時だということ言ったら、マラソンを走る女性はその末裔ということになってしまう。まあ、そういうこともあるかもしれないが、時代は大きく変わった。第1回東京国際女子から20年以上。例えば誰も、そのレースで優勝したスミス夫人のようにハンカチを使って口を覆うことはない。八百年前であれば、その変化はなお更であろう。

次に男性諸君へのご注意である。あの若い僧はすきだらけだったから言い寄られたのだ。わざとすきを作っていたとも思われる。そしてよもすがらの愛撫を許した（、つまり楽しんだ）うえで、まあこんな山の中の女なんてと、平気で嘘をついたのだ。老僧も寝た振りをしながら、またいつもの癖か（つまり初犯ではない）、でもわしの若い頃に比べればまだまだかと思って、放置していたのだろう。でも女の情欲の深さはそんなものではなかったのだ。さらに四百年後、白拍子として現れた女が境内に入ることを、本来女人禁制のはずが許してしまう。何年たっても道成寺の僧侶というのはすきだらけだ。そして女はまた日高川に戻った。これはいつでもまた、その時が来れば現れるということだ。そう、さらに四百年経ったのが20世紀、皆さん身に覚えはおありだろうか。もう20世紀が終わってしまうので、この忠告は既に手遅れではあるが。

ちなみに道成寺の住所は「和歌山県日高郡川辺町鐘巻」という念のいったものだ。

（初稿1999. 11. 10）

#### [リバイバル感想]

東映動画「白蛇伝」（昭和33年10月）を子供のころに見た感動を思い出した。全ての声を森繁久彌と宮城まり子が演じた。許仙（きょせん）が少年の頃に飼っていた白蛇が、10数年後に美貌の白娘（ぱいにゃん）となって現れ、幾多の困難を経て人間としての愛を成就する。人間が演じる特撮映画ではできないような、アニメーションならではの圧倒的な表現に目を見張ったし、その物語に込められたロマンスやヒューマニズムが分かりやすく伝わってきた。初めて動くジャイアントパンダを見たのもこの映画であった。

さて、道成寺では女が蛇になり、白蛇伝では蛇が女になった。この場合の蛇は魔力や超能力

の象徴でもある。それが美貌の女性であることに読者や聴衆は驚くことはあっても、違和感を覚えることは無いのではないか。それはなぜか。そう、これ以上は書かないこととしよう。それよりも、白蛇にからまれる夢でも見ながら寝よう。

(2021. 1. 16)